

近世藩立医育施設と牛痘種痘の普及

鈴木 友和

公立学校共済組合近畿中央病院

わが国の医学が明治以降急速に躍進することを可能にした主な要因として、江戸中期以降における医学教育施設の隆盛が指摘されて久しい（緒方富雄，1955）。しかし諸藩の藩立医育施設を俯瞰的・系統的に調査・分析した研究は極めて乏しい。本研究では18世紀後半から慶応三年（1867）までの間に開設された藩立医育施設を対象に、すでにその設立理念、西洋医学受容状況、西洋医学教育実施状況及び附属施設（図書館、薬草園、寄宿舎及び診療施設）の設置状況について報告した。今回は藩立医育施設が嘉永二年（1849）に始まった牛痘種痘の普及にどのように関わったかを調査分析することにした。牛痘種痘の成功は当時西洋医学の優位性を実証する決定的要因であったと見做されている。

1. 種痘に係わった藩立医育施設の数はいくつだったか

種痘は藩の許可の下で行われた。自藩に藩立医育施設を有する49藩のうち、種痘の普及に係わった藩は少なくとも17藩であった（35%）。このうち藩立医育施設と共に関わった藩の数は9、藩立医育施設抜きで種痘に係わった藩の数は8で、ほとんども関わっていた。藩立医育施設がありながら、それを活用しなかった藩が意外に多いようだ。これらの藩では、まず藩立医育施設に諮ったが、賛意を得られなかったのだろう。その理由として考えられるのは、漢方のみを採用していた施設であれば、洋方を象徴する種痘に係わることは強い抵抗があったと考えられる。或いは座学主体で学理面の教育に携わってきた施設であれば、種痘への関与は施設の方針にそぐわないと見做されたかも知れない。次いで藩立医育施設レベルでみると、種痘に係わった藩立医育施設の数はいくつ（全58施設の16%）であった。また施設型別でみると、I型が3施設、II型が6施設で、種痘に係わった率はII型の方が高い傾向がみられた。

2. いつ頃から種痘に係わり始めたか

諸藩が種痘に関わり始めた時期の年次推移をみると、嘉永二年から同四年までにほとんども集中しており、極めて迅速であった。自藩の藩立医育施設と共に関わった藩における推移も同様であった。しかしその後急に急減し、嘉永五年と同六年に開始した藩は皆無であった。これは幕府の蘭方禁止令（嘉永二年-安政五年）の影響を受けたと考えられる。

3. 具体的にどのように関わったか

種痘に係わった9藩のうち、少なくとも5藩が藩立医育施設内に種痘専門の部署を設けて担当者を指名し、様々な施策を打ち出した。その主なものを挙げると、町在医への接種方法の伝授（2施設）、接種記録の作成と提出（2施設）、教育カリキュラムへの採用（1施設）、種痘書の翻訳・執筆（2施設）及び種痘のための廻村（2施設）であった。

これらの施策は学究的センスが光るものを含み、施設のアカデミックな気風を反映しているようだ。しかし夫々の施策を実施した施設の数はいくつと少なく、一般化していたとは言えない。藩立医育施設の種痘普及への貢献度が量的に低いことは明らかである。その理由は詳らかでない。現代の視点で考察すると、医療より医学に、また臨床医学より基礎医学に、より強い関心をもつ教官が多い教育施設に対し、当時最先端の医療乃至公衆衛生的プロジェクトへの参画を求めるのは些か酷かも知れない。